

編集後記

本年はじめて『木簡研究』の編集に携わることとなつた。いままで委員の末席を汚しながら、特に会の実務に直接関わるということはなかつたので、いきなり本号の編集長といつても勝手がわからず、いささか戸惑つた。それでも、少しは額に汗して働くねばと張切つてお引受けしたのであるが、性來の鈍重に加え、予想に反して特に秋口からは公私ともに多忙を極め、結局は幹事諸氏に頼り切ることとなつてしまつた。特に古尾谷知浩氏には多大の御苦労をおかけし、感謝に耐えない。

今年もまた全国各地の発掘現場から六〇本余の貴重な報告原稿をいただくことができた。それぞれに御多忙を押しての執筆であり、本誌がこれら多くの方々によつて支えられていることを改めて強く実感する。本来収録するべくして本号にはなお原稿を頂戴できなかつたものもあるが、全国の木簡情報を集約・記録し、それを現場に返すという本誌の重要な使命を全うできるよう、今後とも一層の努力を傾けていかねばならない。本号にはまた昨年大会でのヤニン教授の報告「ノヴゴロドの白樺文書」、および長屋王家木簡についての森公章、古代の算木に関する鈴木景一両氏の論考を掲載することができた。原稿をお寄せいただいた多数の方々に深甚の謝意を表わ

したい。

本誌も時代の波に抗しきれず、昨年（前号）から電算写植による印刷へと切替わつてゐる。活字と比べての紙面の品格などは問うても詮ないことである。ただ当初から懸念されたことであるが、複雑な記号・ポイントを駆使する本文の正確な表現が生命である本誌のような場合、まだ不馴れということもあるのか、電算写植がこちらの意を即座に満たすようになるまでにはまだまだ問題がありそうで、活字では考えられなかつたようなミスも生じている。本号もあと残されたわずかな時間、校正に全力をあげねばならぬが、出来あがつた雑誌に目を通すまでは不安である。また本号も例年どおり大会直前まで押しつまつての刊行であるが、入稿の全般的な遅れに加え、手書き原稿の初稿が出るまでに大変時間がかかつたという事情が関係している。これは印刷所を督励すべき問題であるが、フロッピーディスクの初稿は滞りなく出でることを思えば、刊行作業の迅速化のためには、あるいは可能な限りのフロッピーディスクをお願いせねばならぬのかもしだれぬ。これも電算化とともに時代の流れとすれば、筆者などには大変つらいことである。

最後になつたが、昨年の大会における規約の改正により、新たに団体会員の制度が設けられ、本年早速に二団体が会員として承認された。各地の調査機関の方々の入会に際し、この制度が十分に活用されることを期待している。

（鎌田元二）